

平成 30 年度 プロジェクト研究評価報告

プロジェクト研究課題名	農業・農村コミュニティの再生に向けた地域農業・農村社会の構造的な変化に関する研究
研究実施期間	平成 30 年度～平成 32 年度
プロジェクト研究の概要	<p>農業の担い手、農村地域に係る諸指標を見ると、担い手における労働力不足の加速、集落営農組織の法人化に関する地域格差の拡大、過疎化・高齢化の進展に伴う集落機能の低下といったこれまでの延長線上にある動きだけではなく、農地所有世帯の不在村化や担い手として活動してきた大規模経営等における経営継承の困難化といった、これまであまり見られなかった新たな動きが出てきていることが明らかになってきている。</p> <p>こうした状況の中、ICTの活用による経営効率化や意欲ある女性の経営参画等を促進し、競争力のある農業の担い手を育成・確保すると同時に、これらの者が居住する農村地域の資源維持やコミュニティの再生を図っていくことが求められている。</p> <p>このため、地域農業や農村社会の構造的な変化が特徴的な地域、様々な課題が顕著になりつつある地域を選定して、ICTの活用実態や女性の経営参画状況も含めた動向の分析を行い、そのような動きが生じている要因と課題を明らかにする。加えて、統計データを活用した分析から、他産業と比較した農業雇用労働力の現状や、消滅危惧集落の予測を中心とした今後の農村構造の見通しに関する推計を行い、課題に対する対応方向を明らかにする。</p> <p>(小課題 1) 担い手の経営改善、経営継承に関する研究 個別経営体の円滑な経営継承及び持続性の低い集落営農組織の再編に向けて、地域類型、営農類型を踏まえた現地調査を、統計分析も組み合わせつつ実施し、対応方向を明らかにする。</p> <p>(小課題 2) ICT等も活用した担い手の労働力不足解消に関する研究 担い手が規模拡大し経営を改善していくためには、雇用労働力を確保し、女性の能力を活用していく必要がある。このため、農業分野における雇用労働力、女性の経営参画の現状と課題について、統計の組替集計による分析、先進的な取組事例に対する現地調査を行うことで整理し、対応方向を明らかにする。</p> <p>(小課題 3) 農村集落の将来の姿に関する研究 農業集落データベースを活用して消滅危惧集落等に</p>

	<p>関する将来推計を行うとともに、人口減少、高齢化、集落機能の低下と農地の保全状況や集落活動との関係を明らかにし、効果的な対応が図られている先進事例について現地調査を実施する。これらを踏まえて、農村集落の将来の姿を明らかにするとともに、集落の活性化に向けた今後の対応方向を明らかにする。</p>
<p>評価結果</p> <p>○評価会議名及び開催日 「農業・農村コミュニティの再生に向けた地域農業・農村社会の構造的な変化に関する研究」プロジェクト研究評価委員会 平成31年3月27日（水）</p> <p>○評価委員名 荒井 聡 委員 (福島大学農学系教育研究組織設置準備室 教授) 小林 剛 委員 (山口県美祿農林水産事務所 企画振興室長) 橋口 卓也 委員 (明治大学農学部 准教授)</p> <p>○評価基準 ・社会的ニーズへの対応 S.非常に大きな意義がある A.大きな意義がある B.意義がある C.意義が小さい D.意義は見出しがたい ・政策の企画・立案への貢献 S.非常に大きな貢献が見込める A.大きな貢献が見込める B.貢献が見込める C.貢献が小さい D.貢献は見込みがたい</p>	<p>(小課題1) 担い手の経営改善、経営継承に関する研究</p> <p>【評価項目ごとの評価】 () 内は3名の委員の投票数を示す。</p> <p>○ 社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある (1) A:大きな意義がある (2)</p> <p>○ 政策の企画・立案への貢献 S:非常に大きな貢献が見込める (1) A:大きな貢献が見込める (2)</p> <p>○ 学術面からみた研究成果の評価 A:学術的に高く評価できる (1) B:学術的に評価できる (2)</p> <p>○ 研究計画の妥当性 A:妥当である (3)</p> <p>○ 研究資源・実施体制の妥当性 A:妥当である (3)</p> <p>○ 研究目標の達成度 A:達成度は高い (2) B:概ね達成している (1)</p> <p>【総合評価】 () 内は3名の委員の投票数を示す。 1:順調に進行しており、問題はない (3)</p> <p>【評価委員からの主な意見】</p> <p>○ 急速に展開する大規模経営体の経営実態が詳細な実態調査により明らかにされている。大規模経営体の展開を支える集落機能のあり方について示唆を与えるものがある。集落内地権者の管理作業への参画、ほ場の分散解消について貢献が期待される。</p> <p>○ 日本農業の脆弱化、とりわけ水田農業の担い手の弱体化が危惧される中で、担い手の現状を把握し、かつ今後を見通すことは、きわめて重要な位置付けがあると言える。また、今後の担い手への支援策などを考慮する上でも、重要な基礎的な情報を提供してくれるものと期待される。加えて、いわゆる農業構造分析に取り組む者が少なくなっている中で、貴重な研究となろう。</p>

<p>・ 学術面からみた研究成果の評価</p> <p>S.学術的に非常に高く評価できる</p> <p>A.学術的に高く評価できる</p> <p>B.学術的に評価できる</p> <p>C.学術的な評価はやや低い</p> <p>D.学術的評価は低い</p> <p>・ 研究計画の妥当性</p> <p>S.非常に良い</p> <p>A.妥当である</p> <p>B.概ね妥当である</p> <p>C.やや妥当でない</p> <p>D.見直しが必要である</p> <p>・ 研究資源・実施体制の妥当性</p> <p>S.非常に良い</p> <p>A.妥当である</p> <p>B.概ね妥当である</p> <p>C.やや妥当でない</p> <p>D.見直しが必要である</p> <p>・ 研究目標の達成度</p> <p>S.達成度は非常に高い</p> <p>A.達成度は高い</p> <p>B.概ね達成している</p> <p>C.達成度はやや低い</p> <p>D.達成度は低い</p> <p>・ 総合評価</p> <p>1.順調に進行しており、問題はない</p> <p>2.ほぼ順調であるが、改善の余地がある</p> <p>3.計画等を変更する必要がある</p> <p>4.中止すべきである</p>	<p>○ 現地に深く入り込み詳しく調査、整理されている。今後は、調査結果に基づき改善案を立て現場の担当者、農家との意見交換による改善案の実践、評価という研究成果の良い循環を期待したい。</p> <p>(小課題2) ICT等も活用した担い手の労働力不足解消に関する研究</p> <p>【評価項目ごとの評価】 () 内は3名の委員の投票数を示す。</p> <p>○ 社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある (1) A:大きな意義がある (2)</p> <p>○ 政策の企画・立案への貢献 S:非常に大きな意義がある (1) A:大きな貢献が見込める (2)</p> <p>○ 学術面からみた研究成果の評価 A:学術的に高く評価できる (2) B:学術的に評価できる (1)</p> <p>○ 研究計画の妥当性 B:概ね妥当である (3)</p> <p>○ 研究資源・実施体制の妥当性 A:妥当である (1) B:概ね妥当である (2)</p> <p>○ 研究目標の達成度 A:達成度は高い (1) B:概ね達成している (2)</p> <p>【総合評価】 () 内は3名の委員の投票数を示す。 1:順調に進行しており、問題はない (3)</p> <p>【評価委員からの主な意見】</p> <p>○ 先進的な農業労働力調達システムについて詳細な実態調査に基づき明らかにしている。これにICT技術がどのように貢献するかについて整理することが期待されている。また、就業構造基本調査の統計分析と実態調査を有機的に関連させて調査を設計し、外国人労働力の就業なども視野に入れるなど、農業労働力不足解消について総合的に検討していただきたい。</p> <p>○ 日本農業の脆弱化、とりわけ担い手の弱体化が危惧される中で、農業部門における雇用労働力の動向や、女性の参画の状況に</p>
---	--

ついでに現状把握は、重要な課題であると言える。特に、これまで必ずしも明瞭にされていない分野だけに、必要性も高いと考えられる。また、今後の担い手への支援策などを考慮する上でも、重要な基礎的な情報を提供してくれるものと期待される。ただし、逆に新規性の高い課題であるだけに、分析の対象や視角など、さらに十二分に吟味される余地があろう。

- 多様な研究テーマに取り組みされており、現場に対して有意義な調査事例があるので現場に対して情報発信をお願いするとともに、引き続き研究をお願いしたい。

現在、各地でICTの導入について取り組まれているが、経営面での検証が遅れており、本研究での取組に期待したい。

(小課題3) 農村集落の将来の姿に関する研究

【評価項目ごとの評価】 () 内は3名の委員の投票数を示す。

- 社会的ニーズへの対応
S:非常に大きな意義がある (1)
A:大きな意義がある (2)
- 政策の企画・立案への貢献
S:非常に大きな貢献が見込める (1)
A:大きな貢献が見込める (2)
- 学術面からみた研究成果の評価
A:学術的に高く評価できる (2)
B:学術的に評価できる (1)
- 研究計画の妥当性
A:妥当である (3)
- 研究資源・実施体制の妥当性
A:妥当である (3)
- 研究目標の達成度
A:達成度は高い (1)
B:概ね達成している (2)

【総合評価】 () 内は3名の委員の投票数を示す。

1:順調に進行しており、問題はない (3)

【評価委員からの主な意見】

- 中山間地域政策や食料・農業・農村基本計画の見直し等政策形成に大いに関わることが期待される研究である。国勢調査データ等総合的な分析により、精度を高めた推計を期待したい。また、

	<p>衰退・消滅が危惧されている農業集落の維持について実証研究とのリンクによる研究の展開を期待したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 近年、農業集落における各種機能の低下が危惧される中で、非常に重要なテーマであると言える。ただし、農業集落の態様には地域差があり、また、同一地域でも個々の農業集落の現状には差がある。加えて住民の意思・意向も尊重した政策が求められており、そのことに資するような分析が期待される。さらに、近年注目されている「田園回帰」に関する現状把握や各種の分析・報告内容との整合性の有無についても、分析がなされることが期待される。必要とされる調査対象も基本的に網羅されており、また、十分な研究体制が組まれている。加えて、ほぼ順調に研究計画に沿って研究が実施されており、成果も意義あるものと判断される。 ○ 集落の話し合い回数が増加している件については、様々な人と議論を重ね、解析いただきたい。
<p>今 後 の 対 応 方 針</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各小課題において、成果報告会の開催及び学会などを通じて幅広く研究成果を発信する。 ○ 担い手の経営改善、経営継承に関する研究については、ほ場の分散解消に関し、新たにはほ場の分散状況を数値として表現する指標の開発に取り組む。また、今年度は、持続性の低い集落営農組織の再編に向けて、その実態を明らかにし、対応方策を検討することとしているが、その際には現場の担当者等と十分に意見交換をしつつ、行っていく。 ○ ICT等も活用した担い手の労働力不足解消に関する研究については、労働力不足の全体像を明らかにするため、新たにコアな農業労働力を市町村等の小地域別に推計する予測モデルの構築に取り組むとともに、外国人労働力を含め、常雇、臨雇をめぐる課題・状況を、現地調査等により把握する。 ○ 農村集落の将来の姿に関する研究については、集落別のパネルデータを作成し、近年の農業集落の変容を集落機能や活動状況の変化に着目して分析する。この中で、日本型直接支払の実施状況や田園回帰の動きとの関連についても検討する。また、集落別の国勢調査人口データを用いたコーホート分析による30年後の集落別人口から、消滅危惧集落数等を地域別に推計するとともに、地域資源の保全状況と把握し、集落の存続と地域資源管理に関する課題を明らかにする。これらを踏まえて、農村集落の将来の姿を明らかにするとともに、今後の対応方向を明らかにする。